

## アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2010年1月14日（木）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

発表者：何義麟（台北教育大学副教授）

テーマ：在日台湾人と日中友好運動——ある台湾留学生の自分史を手がかりとして



### 発表の構成

- 一、日華親善と日中戦争
- 二、戦後在日台湾人の新中国支持運動
- 三、なぜ在日台湾留學生は中共を支持したのか
- 四、おわりに——日中友好運動における台湾人の役割

戦後日本社会の中で、不可視化されてきた在日台湾人。本発表では、主に一人の台湾人留学生・蔡朝焯氏に焦点をあて、彼の具体的な軌跡をたどる形で、戦後の日本社会における台湾人の位置とその活動の特徴について、特に中国との関係を中心に詳細に論じられた。

具体的には、まず「一、日華親善と日中戦争」において、日中戦争という時代状況の中で、当時の台湾を代表する知識人の一人であった蔡培火が、「日華親善」という課題を「大日本帝国の国策問題」として主張し、そこに台湾人の担われる役割をいかに見いだしたのかについて、矢内原忠雄、蔣渭水という知的系譜との関連で紹介された。その上で、日本の敗戦によって「日華親善」という課題が、台湾人の中でどのように再解釈されていくのかを、在日台湾人の動きに即して論じられた。すなわち「二、戦後在日台湾人の新中国支持運動」では、まず日本に来ていた台湾人留学生が、敗戦

によって混乱する日本社会の中で、中国大陸出身の人々と、どのような関係を築いていったのかについて、特に華僑団体の組織変遷といった制度面からの詳細な分析が紹介された。その上で、戦時中に日本に渡った台湾人留學生、特に1938年に日本に渡り、戦後も日本社会で生活が続けた蔡朝焯氏に取り上げられ、彼の活動と思想に基づいてその後の議論は展開した。

「三、なぜ在日台湾留學生は中共を支持したのか」では、台湾人留學生の生活の場であった清華寮（植民地期の高砂寮）において、中華人民共和国の成立前後の時期に「新中国」への期待が雰囲気として盛り上がっていった状況、そして1950年代の華僑の集団帰国の流れの中で、「新中国建設」に寄与するという目的で、在日台湾人の多くが中国大陸を「祖国」として帰国していった状況について、蔡氏の証言に基づいて説得的な説明が行われた。その上で、このような在日台湾人の動向は、当時の日本の知識人の中に広がっていた「日中友好」という機運とも連動するものであったことが論じられた。しかし発表の最後「おわりに——日中友好運動における台湾人の役割」では、中国に渡った在日台湾人の多くが、文化大革命以降、新中国へ「疑問」を抱くようになる状況が説明されることとなる。そして約300名の清華寮生のうち「少なくとも76名の台湾人留學生が中国へ帰国した。その内、52名がその後次々と日本に戻り、11名が中国大陸で死去、中国での定住者はわずかに13名となった（2008年末）」という蔡氏の証言によって、発表は締め括られた。

本発表は、東アジアにおける冷戦そしてポスト冷戦という国際状況の中で、在日台湾人にとって「祖国」とは、「中国」とは、「台湾」とは、いかなる存在だったのかという問題を、鋭く問うたといえるだろう。そして、その問いは、生活者としての個々の在日台湾人にとって、彼ら・彼女らの存在を不可視化する「日本」もしくは日本社会とはいかなる存在であったのかという問いにも繋がっていると思われる。

（文責：松田京子）